

〔普及の現場から〕

広げよう和牛放牧

井笠農業普及指導センター

はじめに

近年、耕作放棄地の増加が全国的に問題となっています。

生産物価格の低迷や担い手の高齢化、後継者の不在等様々な原因によりやむなく耕作を諦めたものと思われませんが、この放棄地を安全地帯にしてイノシシやシカが里に下りてきて周りの農作物が被害にあい、更なる耕作意欲の低下を招いたり、景観が悪化してますます近寄りがたくなったり、という悪循環が進んでいます。

この耕作放棄地を解消し、農地を守る取組として、全国で「和牛の簡易放牧」が行われており、岡山県でも数年前から各地で推進しています。

今回は、井原地区での和牛放牧の取組について紹介したいと思います。

1. きっかけ

井原市芳井地区の肉用牛農家である小西さんは、電牧柵を購入し、牛舎の周辺で耕作放棄地に牛を放牧していました。しかし近隣で十分な土地を確保することが難しい状況で、普及センターに相談を頂きました。

普及センターでも野菜担当や果樹担当と相談し、牛を放せる土地はないか探しましたが、中々見つかりませんでした。

その要因としては、牛の扱いになれていない、牛が逃げないか、近隣の人に文句を言われぬか等々、土地の所有者の人に不安があるということが考えられました。

2. 展示ほの設置

和牛の放牧は全国的に広がってお

り、一般的な技術ではあるのですが、やはり地元で行うとなると不安もあるということで、「新技術活用優良農地利用高度化推進事業」を利用した展示ほを設置し、地域の人に効果を見てもらうことにしました。

井原市青野町のぶどう農家に協力を頂き、ため池がある10a程度の水田を展示ほにしました。



3. 地域ぐるみでの推進

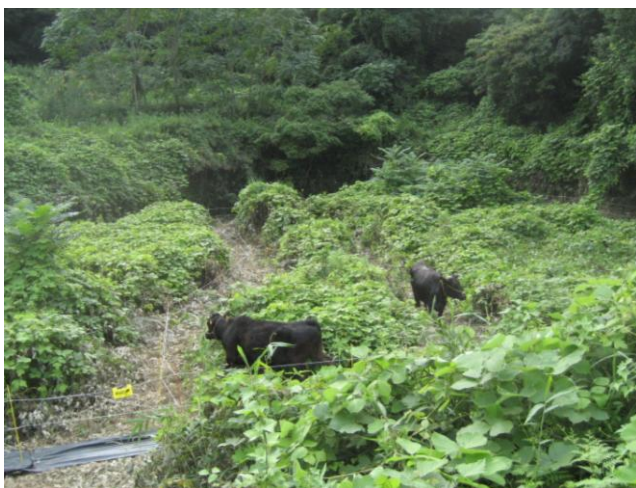
展示ほを設置するに当たり、市や農協、近隣の自治会長など関係者で集まり、和牛放牧の効果や注意点について話し合いをし、不安な部分を残さないようにしました。

4. 展示ほの設置

ほ場は夏になってすっかりクズで覆われてしまいました。暑い中、小西さんと関係機関で2時間程度で電柵を張りました。夏は雑草が伸びるのが早いことから、しばらく放牧を休んでいる間に電柵に届くほど草が伸びてしまいます。下草刈りの手間をなくすために今回は防草シートを張りその上から電柵を設置しました。



5. 放牧の効果



放牧開始2, 3日後には地面が見えてきました。7日も経たないうちに、すっかりクズはなくなっていました。



1ヶ月後、クズが無くなった後はイネ科の雑草やセイタカアワダチソウなど別の植物が繁茂し出しました。そこで再度柵を設置し、放牧をしました。2度の放牧により、クズだら

けだったほ場もすっかりきれいになり見通しがよくなりました。

6. 地域への広がり

展示ほの放牧が終わってからも、地元の人から小西さんへの依頼が続き、延べ1ha以上の放牧が行われました。



7. 今後の課題

地域内で放牧を希望される方はいるのですが、放牧可能な牛が常にいるわけではないことや、距離が遠くて一戸の和牛農家では対応しきれないという問題もあります。

今後は井原市内の和牛農家で組織的に放牧が行えるようなネットワークの構築をし、希望者への対応をよりスムーズにすることや、様々な交付金の利用により土地提供する人にも和牛農家にもメリットが生まれるようにする仕組みづくりに取り組んでいきたいと思っています。

井原市はピオーネやベリーAなど、古くからぶどうの産地として有名なところですが、和牛飼育も盛んなところなのです。この放牧の取組により、ぶどう畑の隣で和牛が草をはんでいるというような素晴らしい景観が広がることを期待しながら、普及センター一体となって放牧を推進していきます。